

4. 平成16年度における事業実施結果

(1) 全体として

平成16年度は、わくプロの本格稼働の年でした。

平成15年度から実施したサイエンス・レクチャー、ジュニア科学塾に加えて、高校生を対象とした科学塾、小学校教員を主な対象とした小学理科ネットの各事業を開始し、共同開発型支援事業の推薦も行いました。マツダ財団直接による科学体験事業への支援も含めて、当初計画したわくプロの全てのプロジェクトが立ち上がったこととなります。

中高等学校における授業時間数の確保のために夏休み期間の見直しなどの不測の事態などもあり、予定の参加者数が確保できなかったなどの問題点もありましたが、広島大学の教員、学生・院生、施設、設備を活用し、現場の教員の参加も得て、小学校から高校までの児童・生徒を対象とした幅広い科学教育への取り組みを行うという、当初の趣旨は具体化され出したと言えます。

また、実際の取り組みを進めていく中で、わくプロならではの大きな意義が明らかになってきました。それは、小学校から大学までの教員や、科学館、民間団体等で科学教育に関わる人々などの、地域におけるネットワークづくりの受け皿（プラットフォーム）という役割です。

それを推進するための取り組みとして、新たに、わくプロ・シンポジウムという形で、現場で活躍する幅広い関係者による科学教育の研究会を開催し、大きな手応えを感じました。

今後は、わくプロの各事業の推進とともに、このようなネットワークづくりにも力を入れていきたいと考えています。

(2) 各事業別の評価・反省点

① サイエンスレクチャー

募集の時期や進め方の問題により予定の参加者数には届かなかったものの、内容的には、実験を主体として高いレベルの科学を身近に感じさせ分かりやすく説明するという当初の目的を達したと考えられます。特に、会場内に4か所のサブ実験テーブルを置いて、間近に実験を見せたことは強い印象を与えました。

今後は、広島市こども文化科学館との連携を維持するとともに、広島県東部地域での開催なども検討していく必要があると思われます。

② ジュニア科学塾

学校スケジュールの変更などにより予定の参加者数には達しませんでした。が、昨年の経験から新たに導入した合宿は期待通り生徒間の融和と指導教員等との接点の拡大という点で、大きな成果がありました。

また、昨年に引き続き、大学教員、大学生・大学院生、中高教員の連携による指導は、大きな成果があったと考えられます。

③ 科学塾

ジュニア科学塾と同様、学校スケジュールの変更などにより予定の参加者数には達しませんでした。が、昨年のジュニア科学塾に参加した中学生が高校に進学してこの科学塾に参加した者が参加者の半数を占めるなど、ジュニア科学塾・科学塾と連携して開催することの意義を感じさせました。

また、高校生を対象とした科学塾として、じっくり考えさせ、研究者と語り合

う形の指導方法を導入したことは、意義があったと考えられます。

④ 小学校理科ネット

当面は、理科実験等に関するノウハウ共有という形でスタートしています。各学年毎に質問を受け付けるとともに、その回答を掲示板に書き込むことにより、多くの人々に共有されるようにしています。また、モデル校を設定し利用促進の研究を進めています。

今後は、工夫した実験道具の紹介など、より幅広い活用方法も検討していきます。

⑤ 共同開発型支援事業の推薦

この事業は、まだ萌芽段階であるものの、今後の科学教育に重要だと考えられる事業に対して、課題重視で選択的に支援をしていこうというものです。

本年度の選考に当たっては、①小学校から大学までの教員を中心とした幅広い科学教育関係者の連携のためのネットワークづくり、②小学校高学年から中学生を中心とした子どもたち自身が参加する科学ネットワークづくり、③デジタルコンテンツと実体験の効果的融合、の3つの課題を設定しました。いずれも、今後の地域における科学教育の推進に当たっての重要な要素であり、このような課題指向型の支援手段を持つことは、地域の科学教育の推進に大きな力であると感じました。

⑥ わくプロ・シンポジウム

地域で科学教育に取り組む様々な立場の幅広い関係者が一堂に集まって、それぞれの科学教育の経験を共有し、意見交換をしました。

このような形のネットワークづくりの機会を提供することが、わくプロの大きな役割であると強く感じました。

これからは、個々の事業がそれぞれに実施されているというだけではなく、普段から相互に連携し刺激し合い学び合って、地域の科学教育を充実させていくことが大切だと考えられることから、わくプロのこのような機能は一層重要性を増すものと考えられます。